

佳作

ぼくのおばちゃん

福岡県 福岡教育大学附属福岡小学校二年 酒井 優樹

「あ、がとう…。ま、た、てね…。あ、が、とう…。」

か細く、ふりしぼった声で、何度も何度も「ありがとう」をくり返すおばちゃん。ぼくは思わず、おばちゃんの手をにぎった。

夏休みになると、毎年ひいおばあちゃんに会いに、奈良県からおばちゃんとはとこたちが遊びに来てくれた。おばちゃんは、いつもニコニコえがおで、ぼくにたくさん話しかけてくれた。ぼくも、やさしいおばちゃんやとこたちが、大好きだ。

でも、おばちゃんのおかげがわかってから、毎年夏休みはぼくたちが奈良県まで会いに行くようになった。おばちゃんのびょう気は、せきずいのうへんせいしようとあって、年々話せる言ばがへり、思うように体が動かせなくなっていくびょう気なのだ

そうだ。そしてこのびょう気は、なおすためのくすりも方法もないらしい。

おばちゃんの家に着くと、いつもおばちゃんはなきながらおむかえしてくれて、福岡県へ帰る時もしながら見おくってくれた。

おばちゃんの家に着いてさいしよにするのは、スーパーマーケットへの買い出し。そこで、おばちゃんが食べやすいものを考えながら食ざいをえらぶ。帰って大人たちがごはんを作っている間は、おばちゃんやとこたちとたくさんお話しして、おさらやおはしをならべる。

ごはんを食べる時、おばちゃんはふるえる手をゆっくりゆっくり動かしながら、一生けんめいおかずを口にはこぶ。とても大へんそうだったから、食べさせてあげたいと思って、ぼくはせきを立った。すると、

「おばちゃんの今の目ひょうは『ごはんをのこさず一人で食べること』だから、見まもってあげてね。」と、おばあちゃんが言った。見まもることも、やさしさなのだ、ぼくは気づいた。

少しずつ、少しずつではあるものの、おばちゃんは自分の力でごはんをかん食した。そして、ゆっく

りと手をそろえていた。

一つ一つの行どう全てにくろうをとまなうのに、今の自分でできるせいっぱいのでやりとげるおばちゃんのすがたに、ぼくはむねがあつくなった。

ぼくたちの帰りぎわになみだをながすおばちゃんの手をにぎって、なみだがあふれそうになった。

ぼくは、

「おばちゃん、またぜったいに会いに行くからね。おばちゃんのがんばっているすがた、また見せてね。」と、おばちゃんの手を見て言った。

ぼくも、自分の力でさい後までやりとげることをつみかさねて、そんなすがたをおばちゃんに見てもらいたいと思った。